

“Ibasho” , Cultural Identity, Mental Health of
Multiethnic People

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 一代 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/468

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



多文化環境と精神的健康

— 文化的アイデンティティと「居場所」を中心に —

“Ibasho,” Cultural Identity, Mental Health of Multiethnic People

鈴木 一代

SUZUKI, Kazuyo

“Ibasho” that contains the meanings of both one’s “actual living place” and one’s “psychological place” plays an important role for a positive evaluation of life (Suzuki, 2009, 2012). However, it is not clear whether “Ibasho” is related to (cultural) identity formation in multicultural environments. This study aims to clarify the relationship among “Ibasho”, cultural identity and mental health. The participants were ten Japanese-German women who have Japanese mother and German father and living in Germany. Repeated interviews had been employed during five years. The results suggested the following: Three types of cultural identities were identified namely, balanced bicultural identity or a predominance of either Japanese or German identity, and “Ibasho” influenced cultural identity formation as well as mental health of multiethnic people. Furthermore, the relationship among “Ibasho”, cultural identity and mental health was illustrated.

<問題>

現代社会においては、精神的健康（メンタルヘルス）やメンタルヘルスサポートなどが注目されている¹⁾。特に、グローバル化に伴い、異文化接触や複数文化環境における精神的健康は重要な課題になっていくことが予想される。本稿では、多文化環境のなかで生活する人々、とりわけ国際結婚家庭で成長する日系国際児²⁾（一方の親が日本人、他方が外国人の子ども）の文化的アイデンティティ、「居場所」、そして精神的健康について議論する。

「居場所」は、広辞苑では、「いるところ、いどころ」として示されるように、本来は、「居る場所」（空間的・物理的な意味）を指す言葉であるが、1985年に不登校の子どもをもつ親たちがつくった、学校以外の行き場としての「東京シュレー」をきっかけに、「居場所」が心理的な意味で用いられるようになったと言われている（石本、2009）。すなわち、不登校の子どもたちは、空間的・物理的な意味では、学校に行かなくても家には「居場所」があったが、学校のある時間帯に居るべきではない家にいても、心理的な意味では「居場所」にはならないことから、「東京

キーワード：「居場所」、文化的アイデンティティ、精神的健康、日独国際児、多文化環境

Key words : “Ibasho”, cultural identity, mental health, Japanese-German women, multicultural environment

シューレ」のようなフリースペースは心理的な意味での「居場所」、すなわち「心の居場所」でもあると考えられた (ibid.)。つまり、「居場所」は、この時点では、「空間的・物理的・実地的な居場所」と「心理的・精神的な居場所」の両方を含んでいた。その後、「居場所」は、「空間的・物理的・実地的な居場所」というよりは、むしろ心理的な意味合いをもつ言葉として一般的に用いられるようになった。しかしながら、「居場所」の概念についての共通理解が得られているわけではなく、明確な定義は存在しない。したがって、さまざまに定義されており、たとえば、「生活の場所」、「心の居場所」、「安定感や安心感を実感できる場所」(額賀, 2014)、「自分らしく生き生きとしていられる場所」(鈴木, 2009) などである。

ところで、多文化環境と「居場所」に着目すると、多文化/背景をもつ子どもや若者(海外帰国生、日本在住外国人、国際児など)にとって、「居場所」はひとつではなく複数存在する可能性があること、そして、複数の「居場所」をもち、それらを統合していることが、かれらには重要であるという指摘がある(額賀, 2014)。多文化/複数文化背景をもつ人々は、現在の居住地(国)にだけではなく、そのほかの国(出身国、他方の親の国など)にも「居場所」をもつこと、すなわち国境を越えて複数の多様な「居場所」を持つことが可能であり、複数の居場所の存在によって、かれらはこころの安定や居心地のよさを感じることができるという。その際に、「居場所」は「ホーム(home)」の概念でとらえられている。ここでのホームとは、家/故郷であり、人々が「帰属意識や愛着、安心感を抱く場所」である。また、通信技術の発達によ

るデジタルメディア(Facebook, Line, Skype, WhatsAppなど)の活用が「居場所」や「居場所づくり」に大きな影響を及ぼしており、遠く離れた複数の国に「居場所」をつくることを容易にしている(山ノ内, 2014; 村田・古川, 2014)。さらに、デジタルメディアの活用は、「想像上の居場所」(ヴァーチャルな「居場所」)の形成に大きな役割を果たしている。すなわち、現代の若者たちの「居場所」は、かれらが現実に住んでる場所(目に見える物理的空間)に存在するだけではなく、国境を越えたほかの国(非居住国)にも存在するし、また想像の世界として存在することもある(徳永, 2014)。

「居場所」と精神的健康については、鈴木(2009, 2012)の日本人国際結婚女性を対象にした研究がある。鈴木は、①日本からほかの国に文化間移動をしたことへの肯定的な評価(精神的な安定、満足感、幸福感など)には、新しい居住国のなかに「居場所」があるという感覚・意識がかかわっていること、②「居場所」には、「実地的な居場所」(実際にいる場所があることであり、家[生活基盤]、仕事/職場、学校、日本人・日系人コミュニティなど)と「精神的な居場所」(精神的に落ち着ける場所、居心地がよい場所、他者から受け入れられていると感じられる場所で、自己実現などを含む)という2つの側面があり、肯定的な評価には、「実地的な居場所」と「精神的な居場所」の両方か、あるいは、少なくともどちらか一方の存在が必要であること、③「実地的な居場所」と「精神的な居場所」は必ずしも一致しないこと(例:「家」が「実地的な居場所」でもあり、「精神的な居場所」でもあるならば、両者は一致しているが、住む場所[実地的な居場所]としての

「家」はあっても、そこには心の安らぎや居心地の良さ〔精神的な居場所〕はなく、別のところに「精神的な居場所」がある場合）を示唆している。したがって、精神的健康を考える場合には、「精神的な居場所」（「心の居場所」）、つまり、心理的居場所を問題にしがちだが、それだけでは不十分であり、「居場所」を論じる際には、物理的・空間的居場所である「実際の居場所」についても考慮し、「精神的な居場所」と「実際の居場所」の両方の側面から検討する必要がある。また、両側面からアプローチする方が、精神的健康、および、問題の解決やサポート（「居場所づくり」など）を考える際には有用であろう。

なお、「居場所」に相当する概念として、英語の「ホーム」（home：家/故郷）やドイツ語の「ハイマート」（Heimat：故郷/ふるさと）があるが、類似している部分はあっても、日本語における「居場所」とは完全には一致しない。したがって、居場所は日本/日本語に固有の概念として、「Ibasho」として表現されることが多い。また、「居場所」は、発達や体験によって変化していくものととらえることができる。

本稿では、パイロット・スタティとして、複数文化環境のなかで生活する、母親が日本人である日系国際児を対象に、文化的アイデンティティ、「居場所」、そして精神的健康との関係について検討する。

ここでの文化的アイデンティティは、「自分自身がある文化に所属しているという感覚（文化的帰属感）あるいは意識（文化的帰属意識）」（鈴木, 2008）とする。また、精神的健康については、WHOは“a state of well-being”（良好な状態）としているが、ここでは、日系国際児が語りのなかで、自分自身の

精神的な安定や幸福感などをどのようにとらえ、評価しているかに着目する。

＜方法＞

調査参加者：ドイツ生まれ、ドイツ在住で、日本人の母親とドイツ人の父親をもつ日独国際児女性（青年後期から成人初期）10人（学生6人、有職者3人、無職1人）。全員、日本語とドイツ語の両方を使用できるが、その程度には差がある（日本語能力試験³⁾の1級が2人、2級/N 2が3人、3級が1人）。日本への一時帰国経験は、ほぼ毎年1人、1年から2年毎に1回が3人、その他は、調査時点までに2回から4回。また1年以上の日本長期滞在経験をもち人が3人いる。

調査期間・場所：20XX年～20XX+2年（一部それ以前のデータも含む）。ドイツNRW州のK市を中心とする都市部。

調査方法：フィールドワーク、参与観察および半構造化面接（一人1回から2回、1回約2～3時間）。主な面接内容は、調査参加者をとりまく環境、成育歴、言語・文化の習得、（文化的）アイデンティティ、「居場所」、精神的健康（困難、悩み、満足感、幸福感など）である。使用言語は、一人（ドイツ語）を除き、基本的に日本語である。面接の際には、承諾を得た上でICレコーダを使用した。

データの整理・分析：録音データを逐語的に文字に起こし、スクリプトを作成後、関連箇所を抽出し、事例ごとに詳細な質的分析をおこなった。

＜結果と考察＞

1. K市および周辺在住の日独国際児女性をとりまく環境の主な特徴

調査地域K市のあるNRW州は、ドイツのなかでも人口が最も多く（総人口の約1/5）、また、ドイツの外国人の約1/4（州人口総数の約1/10に相当）が居住する地域である。そのなかでも、K市は国際都市であり、多様な文化的背景をもつ人々が居住している。一般的市民の日本語への関心はそれほど高いとは言えないが、日本文化センター⁴⁾があるため、希望者は日本語講座で日本語を学ぶことができるし、日本文化に関するイベント等も多数催されている。近年、日本食（寿司等）が広まっており、デパートの食品売り場やスーパーマーケットなどでも販売されている。また、子どもや若者の間では、日本のマンガ、コンピューター・ゲーム、アニメへの関心が高い。そのため、日本人は比較的可容されていると言える。K市には、日本人・日系人コミュニティは存在しないが、日本語補習授業校⁵⁾は存在する。

なお、日独国際児女性の家庭環境の一般的な特徴は、日本人母親のドイツ語が良好であ

ることと、ドイツ人父親も程度の差はあるが日本語が可能なことである（調査参加者による評価）。

2. 文化的アイデンティティ、「居場所」、精神的健康

Table 1は調査参加者10人の文化的アイデンティティ、「居場所」、精神的健康を示している。ここでの文化的アイデンティティは、文化的帰属感・文化的帰属意識であるが、日本人あるいはドイツ人の考え方・感じ方を100%とすると、それぞれをどの程度身につけているかについての自己評価である。言い換えると、自身のなかで両者は同等なのか、あるいは、どちらの考え方・感じ方がより優勢かをとらえている。「居場所」については、「実際の居場所」と「精神的な居場所」に分け、それらの「居場所」が明確にある（「あり」）か、それともない（「なし」）かである。「居場所」の有無がはっきりしない場合は「不明」とした。さらに、精神的健康は、問題・困難の有無とそれへの対処、満足感、幸福感などを総合し、「非常によい」「よい」「普通」「悪い」「非常に悪い」に分類した。

Table 1 文化的アイデンティティ、「居場所」「精神的健康」

事例	文化的アイデンティティ			「居場所」		精神的健康状態
	日本 (%)	ドイツ (%)	日本 J 対ドイツ G	実際の「居場所」	精神的「居場所」	
1	混合	混合	J = G	あり	あり	非常によい
2	両方	両方	J = G	あり	あり	非常によい
3	80	80	J = G	あり	あり	よい
4	50	50	J = G	あり	あり	よい
5	50	50	J = G	あり	あり	よい
6	60	70	J < G	あり	あり	よい
7	40	60	J < G	いいえ	あり	普通
8	40	70	J < G	あり	いいえ	悪い
9	30	70	J < G	あり	不明	普通
10	90	70	J > G	いいえ	いいえ	悪い

(1) 文化的アイデンティティ

日独国際児女性程度は異なるが日本とドイツの両方であるバイカルチュラル・アイデンティティ (bicultural identity) をもつが、次の3つのタイプに分類することができる(鈴木, 2014に準じている)。

〈タイプⅠ〉は「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」(balanced bicultural identity)で、日本とドイツがほぼ同等で優劣がない場合(事例1～5)である。両方を80～100%近くもっていると考えられる3事例(事例1～3)とそれぞれを半分の50%ずつもっている2事例(事例4と5)である。前者の場合、事例1と事例3は日本語能力試験1級、事例2は2級を持っており、日本語の能力も高い。たとえば、事例1(マキ)は、文化的アイデンティティについて「考え方や感じ方はまぜこぜだと思う」「ドイツ人と日本人をわけているわけではない」、「自分のなかでは、100%日本人でもあるし、(100%)ドイツ人でもある」と述べている。

〈タイプⅡ〉は「ドイツ優位バイカルチュラル・アイデンティティ」であり、日本人の考え方・感じ方よりも居住地であるドイツ、ドイツ人の考え方・感じ方をより多くもっている場合である(事例6～9)。ただし、ドイツ人の考え方・感じ方が、日本人の考え方・感じ方と比較し、どの程度優位かは事例によって異なる。日本語能力もそれぞれである(差がある)。たとえば、事例9(シマ)は、「日本人を理解していますけど(略)私はちょっと違うと思っているので。(略)完璧にドイツ人でもないし、日本人でもない。でも、日本人よりもドイツ人と思っている。」と語っている。

〈タイプⅢ〉は、「日本優位バイカルチュ

ル・アイデンティティ」で、居住地ドイツの考え方・感じ方よりも日本の考え方・感じ方をより多くもっている(事例10のみ)。事例10(ナミ)は「私の場合は日本的。直接的なのはドイツ人の性質だけれど、でも私にとってはとても難しい。日本に行ったとき、とてもスムーズで溶け込めてまったく問題がなかった」と話している。この事例は、日本語能力試験2級をもち、日本に1年間滞在したことがある。その際に、日本に問題なく溶け込み、日本人との関係に居心地のよさを感じている。

〈タイプⅡ〉は「居住地の優位性 (domicile determination)」(鈴木, 1997, 2008)によって説明でき、ドイツ在住の日独国際児に限らず、国際児には比較的一般的にみられるタイプだが、〈タイプⅢ〉については、今後、その要因をさらに検討する必要がある。

(2) バイカルチュラル・アイデンティティと「居場所」

Table 1から明らかなように、〈タイプⅠ〉(事例1～5)は、「実際の居場所」と「精神的な居場所」の両方をもっている。それに対して、〈タイプⅡ〉は、両方の「居場所」をもつ事例6、どちらか一方の「居場所」のみ明確な事例7～9の3事例である。事例6は〈タイプⅡ〉に分類されるが、日本人とドイツ人の考え方・感じ方の差が少ないため、〈タイプⅠ〉に近い〈タイプⅡ〉とも考えられる。〈タイプⅢ〉は、「実際の居場所」も「精神的な居場所」もどちらの「居場所」ももっていない。

（3）バイカルチュラル・アイデンティティと精神的健康

バイカルチュラル・アイデンティティの3つのタイプと精神的健康（状態）についてみると、〈タイプⅠ〉に分類される事例は「非常によい」から「よい」なのに対して、〈タイプⅡ〉の精神的健康（状態）は「よい」から「悪い」までさまざまである。〈タイプⅢ〉の精神的健康（状態）は「悪い」に分類される。

3 事例について

3つのバイカルチュラル・アイデンティティのタイプのそれぞれについて、代表的な事例を提示し、「居場所」および精神的健康との関連を考察する。

（1）タイプⅠ：均衡バイカルチュラル・アイデンティティ

【事例1：マキ】（学生、20代初め、日本語能力試験1級、ドイツ語はネイティブと同等、日本語も総合的にネイティブの90%以上という自己評価で、ほぼ日独バイリンガル）

「実際の居場所」は、家、大学院（日本語科）、アルバイト先（日本語学校講師）、日本の祖父母の家（日本に行ったとき）、そして、「精神的な居場所」は、ドイツの家族、ドイツ系国際児の婚約者、日本語（日本語能力、日本語講師としての自分）、日本の祖母である。特に大きな問題や悩みはなく、現状に満足しており、精神的にも安定している。すなわち、「実際の居場所」と「精神的な居場所」の両方の「居場所」があり、精神的健康状態も非常に良好である。また、それぞれの「居場所」に複数の「居場所」がある。

（2）タイプⅡ：ドイツ優位バイカルチュラル・アイデンティティ

【事例9：シマ】（学生、10代後半、日本語能力試験3級、ドイツ語はネイティブと同等だが、日本語は総合するとネイティブの70%という自己評価でドイツ語が優位、1年間日本の高校へ留学）

「実際の居場所」は、ドイツの家、学校（ギムナジウム）、日本語補習授業校、日本の祖父母の家（日本在住時あるいはヴァーチャルな意味）、「精神的な居場所」としては、ドイツの家族、ドイツ人友人、日本（バーチャルな日本）のようだがあまり明確ではない。約4年前（中学生）の調査の際には、日本人とドイツ人が50%ずつの自己評価だったが、「やっぱり日本人だと思うから。（略）あまりドイツ人じゃないと思う。（略）全部で、私は日本人だなんて思う。」と語っていたように、むしろ日本人よりで、「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」に近いが、場合によっては、「日本優位バイカルチュラル・アイデンティティ」とも言えた。その後、高校在学中に、1年間日本の高校に、祖父母の元から通学したことにより、日本語の力や日本についての知識や理解は著しく増えた。しかし、ドイツに帰国してから、「ドイツ優性バイカルチュラル・アイデンティティ」に変容している。それまで自身のなかで思い描いていた日本ではなく、実際の日本の生活なかで、ドイツ人と日本人である自分を十分に吟味する機会を得たための変化と思われる。将来は、ドイツの大学に行きたいと考えているが、その後、1年程度また日本に住みたいという。まだ10代後半の高校生なので、ドイツの家族は重要な「精神的な居場所」であると考えられるが、その他の「居場所」を含め、

「精神的な居場所」については、あまり明確でない。発達途上にいるために、いろいろな迷いや不安もあることが推察される。将来に向けて建設的にいろいろと考えているシマの姿からは、精神的健康状態は高校生としては「普通」の状態と判断できる。

(3) タイプⅢ「日本優位バイカルチュラル・アイデンティティ」

〔例5；ナミ〕（有職〔パート〕、30代前半、日本語能力試験2級、ドイツ語はネイティブと同等だが、日本語は総合するとネイティブの45%程度の自己評価でドイツ語が優位、仕事のため1年間日本に滞在）

「実的な居場所」については、家（アパート）はあるが移動の可能性もあり、職場（日本関連）も、パート社員の上、契約期限があるため、不安定である。「精神的な居場所」は、現在特になく、ドイツの社会やドイツ人とはなじめないと感じている。強いて言えば、「ヴァーチャルな日本」にこころの安らぎを見出していると言える。したがって、「実的な居場所」と「精神的な居場所」のどちらもっていないと考えられる。自分はより日本人的と認識しながらも、日本語には自信がなく、面接の際もほとんどドイツ語を使用していた。現在、事例5は、自身の仕事の見通しや将来の居住地について悩みや不安をかかえており、精神的にはよい状態とは言えない。

＜総合的考察 一まとめと今後の展望＞

本研究では、多文化/複数文化背景もつ人々の文化的アイデンティティ、「居場所」、精神的健康（状態）との関係を明らかにする目的で、ドイツ在住の日独国際児女性（母親

が日本人、父親がドイツ人、10代後半から30代前半）10人を対象に複数回の半構造化面接、およびフィールドワークを実施した。

1. 調査参加者であるドイツ在住の日独国際児女性の全員が、程度の差はあるが、日本とドイツの両方に帰属していると感じており、バイカルチュラル・アイデンティティを形成していた。その際、バイカルチュラル・アイデンティティには、3つのタイプがあることが明らかになった。すなわち、両文化を同等、あるいはほぼ同等にもつ（混合を含む）「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」、両文化に帰属していても居住地であるドイツが優勢である「ドイツ優位バイカルチュラル・アイデンティティ」、そして、両文化に帰属感・意識はあるが、居住地ではない日本が優勢と感じている「日本優位バイカルチュラル・アイデンティティ」である。

2. 「均衡バイカルチュラル・アイデンティティ」をもつ日独国際児女性は、「実的な居場所」と「精神的/心理的な居場所」の両方を保持しており、精神的健康に関しても良好だった。「居場所」というと、「精神的/心理的な居場所」が重要視され、精神的・心理的意味で「居場所」があるかなにかが問題とされることが多い。しかしながら、「居場所」という言葉が普及するきっかけになった原点に戻り、本研究のように、「居場所」を「実的な居場所」と「精神的/心理的な居場所」に分けて考え、それらの有無を考察することは、「居場所づくり」などを考慮する際の支援にとって有用であるように思われる（もちろん、「実的な居場所」と「精神的な居場所」が一致することもある）。文化間移動をし

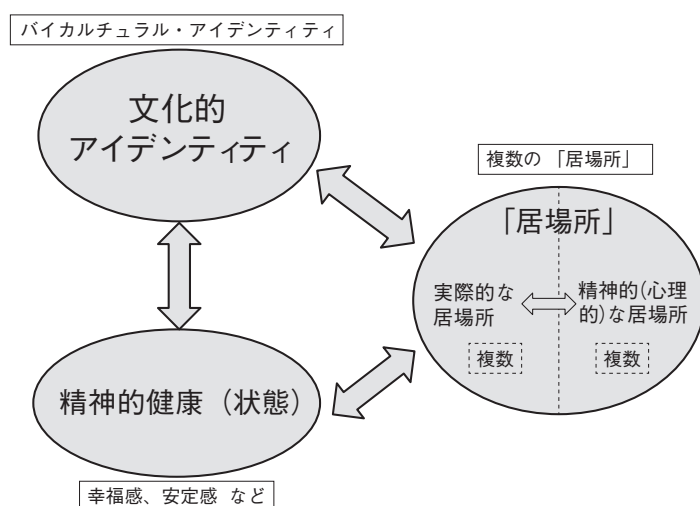


Figure 1 文化的アイデンティティ、「居場所」、精神的健康状態

た成人女性の「居場所」については、「実際の居場所」と「精神的な居場所」の両方があるか、少なくともどちらか一方の「居場所」があることが、精神的健康につながるという鈴木（2009, 2012）の研究結果があるが、本研究の日独国際児女性の場合には明確ではなかった。精神的健康を維持するためには、両方の「居場所」が必要なのか、それともどちらか一方でも可能なのかは、「居場所づくり」などのさまざまな実践的なサポートへの有用な知見となる可能性があるため、今後早急に明らかにすべき課題であろう。

3. 多文化背景をもつ日独国際児女性は「実際の居場所」と「精神的/心理的な位場所」のそれぞれに複数の「居場所」があった。たとえば、事例1（マキ）は、家、大学院、アルバイト先など（以上、実際の位場所）、ドイツの家族、婚約者、日本語（以上、精神的位場所）をあげている。また、すでに額賀（2014）が指摘しているように、複数の「居場所」の存在は、よりよ

い精神的な健康に関係しているようだった（たとえば、タイプⅠ）。「実際の居場所」であれ、「精神的な居場所」であれ、複数の「居場所」の存在は、より精神的・心理的な安定と心地よさを生み出し、精神的健康を促進するであろうことが示唆される。したがって、多文化背景をもつ人たちが複数の「居場所」を確保できるようなサポートが望まれるだろう。

4. 「居場所」とアイデンティティとの関連を指摘する研究も存在する（例：小沢, 2002）。本稿においても、文化的アイデンティティ、「居場所」、そして精神的健康（状態）の間の相互関係性が示唆されたとと言えるだろう（Figure 1）。
5. 本稿では、精神的健康を広義にとらえ、日系国際児が語りのなかで、自分自身をどのようにとらえ、評価しているかに着目したが、精神的健康の定義をより明確にした上で測定する必要もあるだろう。また、「居場所」についても、特に「精神的な居場所」の定義については、今後さらに検討

しなければならないだろう。

6. 本研究は、調査参加者の数が少なく、パイロット・スタディとしての性質をもつ。今後、事例を増すことや、より詳細な検討を加えることにより、本研究によって得られた知見をさらに明確にするとともに、同じ調査参加者の追跡調査によって発達の視点から検討することも必要であろう。

すでに述べたように、「居場所 (Ibasho)」は日本的な概念と考えられる。ただし、他の文化圏においても、「居場所」に相当する言葉は存在しなくても、日本語の「居場所」の概念は理解される可能性が高いように推察される。アイデンティティは、Erikson (1950) によって使用され、普及した用語である。日本発信の「居場所」と欧米発祥のアイデンティティの関係をさらに明確にすることは、グローバル化社会のなかで、増加しつつある多文化背景をもつ人々の精神的健康を維持するための精神的・心理的・教育的サポートに新しい光を当てることにつながるかもしれない。

<注>

- 1) 世界保健機構 (WHO) は、「健康は、身体的・精神的・社会的に完全によい状態を意味し、単に病気や虚弱でないということではない」と定義しており、健康な身体だけではなく、豊かな社会 (人間) 関係をもち、精神的にも安定している状態を健康としている。
- 2) 厚生労働省の人口動態統計によると、2015年には、国内の日本人の国際結婚は、婚姻総数の3.3% (20,976組)、その子どもである日系国際児は出生総数の1.9% (19,079人) だったが、海外出生日系国際児 (約1万人) を加えると約3万人で、

国内外出生総数の約3% (約33人に1人) になる。

- 3) 財団法人日本国際教育支援協会と独立行政法人国際交流基金 (The Japan Foundation) が主催する日本語能力試験 (JLPT: Japanese Language Proficiency Test) は日本語を母語としない人を対象に日本語能力を認定する試験である。2009年までは、1級 (最も難しい) から4級の4レベルだったが、2010年からは、N1 (現実生活の幅広い場面での日本語が理解できる) からN5 (基本的な日本語をある程度理解できる) の5つのレベルになった。
- 4) 独立行政法人国際交流基金は、総合的に国際文化交流を実施する日本で唯一の専門機関であり、23カ国に24海外拠点をもつ。そのひとつがK市の文化センターである。なお、国際交流基金の主要活動分野は、文化芸術交流、海外における日本語教育および日本研究・知的交流の3つである。
(<http://www.jpf.go.jp/j/about/index.html>, 2016.09.17閲覧)
- 5) 日本語補習授業校は、義務教育年齢の海外在住日本人児童・生徒の教育を目的としている小・中学校 (幼稚部、高等部がある場合もある) だが、週1~2回、国語や算数のみの授業をおこなう補助的な学校である。日本国内と同等の教育をおこなう全日制の日本人学校とは異なる。

[謝辞]

本稿の一部は、JSPS科研費2053782, 23402063, および15K13210の助成を受けました。深く感謝いたします。

<引用文献>

- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and Society*. New York: Norton. (仁科弥生 (訳) (1977/80). 幼児と社会 1・2 みすず書房)
- 石本雄真 (2009). 居場所概念の普及およびその研究と課題 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 3 (1), 93-100.
- 村田晶子・古川知樹 (2014). 留学生の第三の居場所:

- SNSを通じた人とのつながりと相互支援：進学の境界線越えに焦点を当てて 異文化間教育, 40, 53-69.
- 額賀美紗子 (2014). 越境する若者と複数の「居場所」：異文化間教育学と居場所研究の交錯 異文化間教育, 40, 1-17.
- 小沢一仁 (2003). 居場所を得ることから自らのアイデンティティをもつこと 東京工業大学工学部紀要（人文・社会編）, 26, 64-75.
- 鈴木一代 (1997). 日系インドネシア人の文化・言語習得：居住地決定との関連性について 東和大学紀要, 23, 115-130.
- 鈴木一代 (2006). 異文化間心理学へのアプローチ プレーン出版
- 鈴木一代 (2008). 海外フィールドワークによる日系国際児の文化的アイデンティティ形成 プレーン出版
- 鈴木一代 (2009). 成人期の文化間移動と生涯発達への影響についての研究：異文化間結婚の場合 埼玉学園大学紀要（人間学部篇）, 9, 69-80.
- 鈴木一代 (2012). 成人期の文化間移動と文化的アイデンティティ ナカニシヤ出版
- 鈴木一代 (2014). バイカルチュラル環境と文化的アイデンティティ：日独国際児の場合 埼玉学園大学紀要（人間学部篇）, 14, 15-28.
- 徳永智子 (2014). 国境を越える想像上の「ホーム」：アジア系アメリカ人の女性生徒によるメディア／ポピュラーカルチャーの消費に着目して 異文化間教育, 40, 70-84.
- 堤正雄 (2002). 「居場所」感覚と青年期の同一性の混乱 島根大学教育学部紀要（人文・社会科学）, 36, 1-7.
- 山ノ内裕子 (2014). トランスナショナルな「居場所」における文化とアイデンティティ：日系ブラジル人の事例から 異文化間教育, 40, 34-52.
- 所』を中心に―」、および The 23rd of International Congress of International Association of Cross-Cultural Psychology (Nagoya, 1. August 2016) のPaper session 2 (MENTAL & PHYSICAL HEALTH) で発表した内容に加筆・修正を加えたものである。

[付記]

本稿は、異文化間教育学会第37回大会（2016年6月5日、桜美林大学）のケース・パネル発表「多文化環境と精神的健康―アイデンティティと『居場所』を中心に―」